

I. 導入

おはようございます。主は預言者イザヤをとおして語られ、**イザヤ書 66:1-2** でこう言っておられます。「**66:1 主はこう言われる。天はわたしの王座、地はわが足台。あなたたちはどこに／わたしのために神殿を建てうるか。何がわたしの安息の場となりうるか。 66:2 これらはすべて、わたしの手が造り／これらはすべて、それゆえに存在すると／主は言われる。わたしが顧みるのは／苦しむ人、霊の砕かれた人／わたしの言葉におののく人。**」この箇所には、三つの根本的な真理がとらえられています。

- (1) 主は、すべてを創られた創造の神であられる。
- (2) 主は遍在されるお方で、被造物を超えたお方である。
- (3) 主は、神を敬うへりくだった者を尊ばれる。

主は、すべての人を神との愛に満ちた絆へと招いてくださいます。しかし、その主の招きに対して、人類はどのように応えてきたのでしょうか。この数週間の学びで見たように、ステファノは最高法院の前で語った際、イスラエルの歴史を振り返りました。アブラムから始まり、ヨセフやモーセなど救い主イエス・キリストを預言的に指し示す人々について語りました。今日は、ステファノのメッセージの最後の部分を見ていきますが、ここで、ステファノと最高法院の形勢が逆転します。ステファノは裁かれるために最高法院に引きずり出されましたが、今度は、裁きが下る危険性をはらんでいるのは最高法院のほうであることをステファノが指摘するのです。



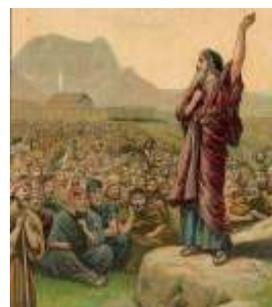
では、使徒 7:37-43 をまず読みましょう。

II. 聖書朗読 使徒 7:37-43, (新共同訳)

7:37 このモーセがまた、イスラエルの子らにこう言いました。『神は、あなたがたの兄弟の中から、わたしのような預言者をあなたがたのために立てられる。』 7:38 この人が荒れ野の集会において、シナイ山で彼に語りかけた天使とわたしたちの先祖との間に立って、命の言葉を受け、わたしたちに伝えてくれたのです。 7:39 けれども、先祖たちはこの人に従おうとせず、彼を退け、エジプトをなつかしく思い、 7:40 アロンに言いました。『わたしたちの先に立って導いてくれる神々を造ってください。エジプトの地から導き出してくれたあのモーセの身の上に、何が起こったのか分からないからです。』 7:41 彼らが若い雄牛の像を造ったのはそのころで、この偶像にいけにえを献げ、自分たちの手で造ったものをまつて楽しんでいました。 7:42 そこで神は顔を背け、彼らが天の星を拝むままにしておかれまして。それは預言者の書にこう書いてあるとおりです。『イスラエルの家よ、／お前たちは荒れ野にいた四十年の間、／わたしにいけにえと供え物を／献げたことがあったか。 7:43 お前たちは拝むために造った偶像、／モレクの御輿やお前たちの神ライファンの星を／担ぎ回ったのだ。だから、わたしはお前たちを／バビロンのかなたへ移住させる。』

III. 教え

モーセはキリストの予型であり、キリストについて語る預言者でもありました。ステファノは、最高法院に向かって**申命記 18:15** のメッセージを改めて語っています。「あなたの神、主は、あなたのうちから、あなたの



同胞の中から、私のようなひとりの預言者をあなたのために起こされる。彼に聞き従わなければならない。」この箇所は、明らかにイエスを指しています。けれども、最高法院は口先でモーセをたたえていましたが、モーセの警告を聞き入れて従おうとはしませんでした。こうして、イスラエルの民がモーセを受け入れなかったように、最高法院もイエスを受け入れませんでした。

モーセはイスラエルの民をエジプトから連れ出し、数々の奇跡を行うことで彼が神から送られた者であることを証明しました。それでもイスラエルの民はモーセを拒んだという点をステファノは強調しています。使徒 7:39 で、最高法院にこのように語っています。「けれども、先祖たちはこの人に従おうとせず、彼を退け、エジプトをなつかしく思い、」民はエジプトをなつかしんだとあります。神に従い仕える人生より、エジプト人に仕える奴隷としての生き方を望んだのです。



これは、最高法院に対する、そして私たちに対する警告です。聖書では、エジプトはしばしばこの世の象徴として用いられます。また、エジプトでの生活は、罪と死の奴隷として生きるこの世の生活を象徴します。イエスに従う私たちは、この世の事柄に心を奪われないよう、常に心を守らなければなりません。

使徒 7:40 で、ステファノはこう続けます。「アロンに言いました。『わたしたちの先に立って導いてくれる神々を造ってください。エジプトの地から導き出してくれたあのモーセの身の上に、何が起こったのか分からないからです。』」人々は、「わたしたちの先に立って導いてくれる神々を造ってください。」と言ったのです。少し考えれば、これがおかしな要求だということがわかるでしょう。造られた像が人を導いてくれるはずはありません。むしろ、人が像を運ばなければなりません。人の手によって造られた物には、人がそこに込めた知恵や力以上のものはないのです。もし、自分が作ったものを神と呼ぶなら、自分自身はそれ以上に偉大な神であることになります。新しい神を作り出せるのですから。そして、自分の作ったものを拝むなら、それは自分の利口さをあがめているに過ぎません。

人の手で造られたものを決して拝んではなりません。人は神ではありませんし、人が作ったものも神になり得ません。けれども、イスラエルの民は自分たちの愚かさが見えなくなっていました。使徒 7:41 はこう語ります。「彼らが若い雄牛の像を造ったのはそのころで、この偶像にいけにえを献げ、自分たちの手で造ったものをまつて楽しんでいました。」これがどれほど愚かなことかは誰の目にも明らかでしょう。民は、モーセをとおして神の驚くべき奇跡を何度も目にしました。にもかかわらず、モーセがシナイ山の山頂に登り、主と会っているわずかな隙に、彼らは偶像を拝んだのです。出エジプト記 32 章を見ると、人々は踊ったり飲み食いしたり、と新しい「神」の前で大宴会を開いていました。



彼らを批判するのは簡単ですが、私たち自身はどうでしょう。偶像にひれ伏すという愚行は、古代のイスラエルの民に始まったことではありません。手を挙げるようには言いませんが、少し考えてみてください。木や石、金属でできた像を拝んだことはありませんか。天地を造られた創造主なる神以上に、人の功績を称えたことはありませんか。

イエスを信じ、聖書の真理を受け入れた後でも、エジプトに戻る、つまり、この世のしがらみに縛られた生き方に戻ってしまいそうなきがないでしょうか。日本には、エジプトと同様、無数の偶像があります。アメリカでは、それほどわかりやすくはありません。偶像の前でお辞儀をするアメリカ人を見かけることはあまりありません。しかし、アメリカ人も偶像を礼拝しています。富や名声、娯楽、性欲、暴力や戦争に心を捧げているのです。

もうひとつ、よく見られる偶像礼拝は、自然崇拜です。歴史上、多くの場所で、太陽、月、

星、山や滝といった自然が崇拜されてきました。先ほど読んだ箇所でも、「お前たちの神ライファンの星」という一節がありましたが、ライファンは木星を指しています。ですから、これは夜空の星を崇拜する例です。けれども、夜空の星さえも、神が創られた被造物です。それ自体に命も知恵もありません。ですから、礼拝の対象としてはふさわしくないのです。

どの文化にも偶像礼拝は存在します。そして、私たちは皆、それぞれのエジプトに戻る誘惑を受けます。しかし、誘惑に負けないという選択肢もあります。誘惑に抵抗する最も効果的な対策のひとつが、イエスをしっかりと見つめることです。ヘブライ 12:1-2 はこのように促します。「12:1 こういうわけで、わたしたちもまた、このようにおびただしい証人の群れに囲まれている以上、すべての重荷や絡みつく罪をかなぐり捨てて、自分に定められている競走を忍耐強く走り抜こうではありませんか、 12:2 信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめながら。このイエスは、御自身の前にある喜びを捨て、恥をもちとわないで十字架の死を耐え忍び、神の玉座の右にお座りになったのです。」

次にステファノが最高法院に改めて語ったのは、歴史の中でイスラエルの民が何度も神に逆らったことです。それは、モーセの時代に限ったことではありませんでした。使徒 7:43 で、ステファノはバビロン捕囚を思い起こさせる預言の言葉を引用しています。「お前たちは拝むために造った偶像、ノモレクの御輿やお前たちの神ライファンの星をノ担ぎ回ったのだ。だから、わたしはお前たちをノバビロンのかなたへ移住させる。」

イスラエルの民による偶像礼拝は、バビロン捕囚の時代まで続きました。旧約聖書の預言者たちは、幾度となく民に警告を發しましたが、ついに神が彼らの偶像礼拝に対する裁きを下されました。ネブカドネツァルがエルサレムを攻め落とし、民を捕囚として連れ帰るのを、許されたのです。バビロンの地で、イスラエルの民はようやく偶像や星を拝むのをやめ、真の神であるアブラハムの神を呼び求めました。そして、神は、彼らを救い出し、神が彼らにお与えになった地へと戻れるようになさいました。



こうして、イスラエルの民は偶像礼拝から解放されました。本当にそうでしょうか。バビロン捕囚以来、ユダヤ人は自然や像を拝まないよう警戒してきました。しかし、悪魔は常に新しい策を練り、神の民に罪を犯させようと誘惑してきます。そして、悪魔が私たちを誘惑する機会として用いるものに、信仰に対する誇りがあります。これもまた、偶像礼拝の一種になり得ます。

荒野で、主が与えてくださった指示に従って幕屋が建てられました。これは、主とお会いする特別な場所です。これを指揮されたのは主ご自身で、これは神の目に喜ばしいものでした。長い年月が経ち、ダビデ王はあることに気づきました。それは、自分が住むきらびやかな宮殿に比べて、主の家はただの幕屋だということです。それで、ダビデは主のために神殿を建てようと決心します。しかし、主はダビデを止められました。それは、ダビデが戦いの人だったからです。そういうわけで、ダビデは神殿建築に必要なものを準備しましたが、神殿を建てることはありませんでした。



ダビデの息子であるソロモン王がついに主の宮を建てました。ソロモンの時代、イスラエルは非常に豊かで、ソロモンは見事な神殿を建設しました。しかし残念なことに、ソロモンには女性関係という弱点がありました。彼はたくさんの妻をめぐったのですが、その妻たちがソロモンをそそのかし、異教の偽りの神々のためにも神殿を建てさせました。これがイスラエルの罫となり、偶像礼拝は排除されませんでした。



ソロモンの神殿は、ネブカドネツアルによって破壊されるまでありました。その後、民は捕囚としてバビロンで70年間過ごしました。バビロン捕囚から戻った後、民は神殿を再建しました。しかし、この時代のイスラエルは貧しかったので、第二神殿には、豪華なソロモンの神殿の面影はありませんでした。

興味深いことに、イエスを殺そうとした張本人であるヘロデ王は、この神殿を元の見事な姿に復元したいと考えました。ヘロデ王は裕福で、建物を建てるのが好きでした。それは、ローマ帝国内での自分の評判が上がるからです。ヘロデ王の神殿復元は、再建ではなく改築と歴史的に呼ばれていますが、大規模な増築が施されました。これは、イエスの時代の神殿の様子です。最高法院と大祭司は、神殿の管理者であり、そのことを誇りに思っていました。実際、神殿を重んじるあまり、神殿が彼らの偶像であったといえます。



使徒 6:13 で、ステファノはこのような非難を受けています。「そして、偽証人を立てて、次のように訴えさせた。『この男は、この聖なる場所と律法をけなして、一向にやめようとしません。』」ステファノは、律法をけなすという告発に対する答えとして、イエスがキリストであると宣べ伝えることはモーセの律法に則っていると示しました。今度は、聖なる場所、つまり最高法院が誇りとしている神殿をけがすという告発に対して、答えます。

では、使徒 7:44-50 を読みましょう。

IV. 聖書朗読 使徒 7:44-50, (新共同訳)

7:44 わたしたちの先祖には、荒れ野に証しの幕屋がありました。これは、見たままの形に造るようとモーセに言われた方のお命じになったとおりのものでした。 7:45 この幕屋は、それを受け継いだ先祖たちが、ヨシュアに導かれ、目の前から神が追い払ってくださった異邦人の土地を占領するとき、運び込んだもので、ダビデの時代までそこにありました。 7:46 ダビデは神の御心に適い、ヤコブの家のために神の住まいが欲しいと願っていましたが、 7:47 神のために家を建てたのはソロモンでした。 7:48 けれども、いと高き方は人の手で造ったようなものにはお住みになりません。これは、預言者も言っているとおりです。 7:49 『主は言われる。「天はわたしの王座、／地はわたしの足台。お前たちは、わたしに／どんな家を建ててくれると言うのか。わたしの憩う場所はどこにあるのか。 7:50 これらはすべて、／わたしの手が造ったものではないか。』

V. 教え

ステファノはこれまでの歴史を認め、ヘロデ王の神殿はソロモンの神殿の代替として正当であるという最高法院の主張に反論しませんでした。しかし、今日のメッセージの冒頭でお読みしたイザヤ書 66 章のみことばを引用し、神は神殿に住んでおられない、神はすべての創造主であられるので、人が建てた家に住まわれない、ということを改めて指摘しました。

ステファノは、このようにして自分に対する告発を言い負かしたのです。彼を責めていた人たちは、ステファノが神殿をけなしているのだから、それは神に対する冒とくだと言いました。ステファノはそれに対し、言った言わないの議論はせず、もっと効き目のある論点を持ち出したのです。つまり、神は神殿に住んでおられないということです。神が実際には神殿に住んでおられないのなら、神殿をけなしても冒とくにはなりません。

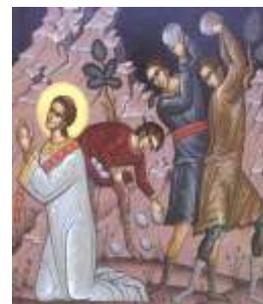
さらに、創造主なる神が神殿に住んでおられないし、住むことはできないという事実を指摘することにより、ステファノは最高法院の偶像礼拝の罪を暴いたわけです。というのも、最高法院は神殿に重きを置きすぎて、神殿が彼らの



偶像のようになっていたからです。最高法院の議員たちは、きらびやかな神殿の部屋に座り、豪華な衣を身にまとっていました。それ自体は罪ではありませんが、そのような富や名声が彼らの罠になってしまったと言えるでしょう。彼らはおごり高ぶり、罪に陥ってしまいました。そして今、その高慢と罪がステファノの主張によって暴かれたのです。

いろいろな罪があったにせよ、最高法院の議員たちはみことばをよく知っていましたから、ステファノの主張が有効であることはすぐにわかったはずですが、ここで形勢が逆転しました。彼らは、モーセの律法をたてに取り、ステファノを裁こうと考えていました。しかし、ステファノの主張がモーセやその他の預言者の教えに沿ったものであることが明らかにされ、モーセの律法の下で裁かれるべきは最高法院のほうだということになりました。

ヨハネ 5:45-46 でイエスが何とおっしゃったか覚えていませんか。「5:45 わたしが父にあなたたちを訴えるなどと、考えてはならない。あなたたちを訴えるのは、あなたたちが頼りにしているモーセなのだ。5:46 あなたたちは、モーセを信じたのであれば、わたしをも信じたはずだ。モーセは、わたしについて書いているからである。」ステファノが語っているまさにそのとき、このみことばが最高法院にとって現実のこととなりました。すると、最高法院はステファノに憤慨しました。ここでステファノは遠回しに言うのをやめました。モーセ五書の中で、イスラエルの民はたびたび、かたくなで心に割礼を受けていない人と呼ばれています。ステファノは、その言葉をそのまま引用します。使徒 7:51「かたくなで、心と耳に割礼を受けていない人たち、あなたがたは、いつも聖霊に逆らっています。あなたがたの先祖が逆らったように、あなたがたもそうしているのです。」



これを聞いて、最高法院は公平な裁きという建前を捨て、それ以上聞くのを拒否しました。ステファノは外に引きずり出され、石打ちにあいました。こうして死に際しても、ステファノは自分の言動がすべて愛によるものであることを示します。彼を告発する者たちと最高法院が救われることを望む気持ちがあるからこそその発言だったのです。ではもう一度、ステファノの最期の言葉を見てみましょう。使徒 7:60「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」

VI. 結び

ステファノは、イエスに従う殉教者として死にました。そして、イエスと同じように最期まで愛に満ちていました。ステファノの信仰と愛は、私たちに励ましてくれます。私たちはステファノを模範とすべきです。もうひとつ気づいたことは、使徒でも長老でもなかったステファノが、最高法院に対して準備もなく力強いメッセージを語ったことです。これは、私たちにとって励ましであり、課題です。いつどこで主を証するよう求められるかわかりません。ですから、いつも準備ができているのが一番よいでしょう。そのためには、聖書全体を読み、祈りつつ、旧約と新約の両方がどのようにイエスを物語っているかを理解する努力が必要です。

けれども、ステファノのメッセージから一番学ばなければならないことは、さまざまな偶像礼拝から自分の心と生活を守る必要があるということかもしれません。自分は最高法院の議員たちよりましな人間だと思っははいけません。むしろ、悪魔の罠に陥らずにすんでいるのは、ただ神の恵みによるのだということを知るべきです。私たち皆が祈りとみことばの学びと生き方においてイエスに近づいていくようにと祈ります。けれども、何よりも、主イエスの恵みが私たちに注がれ、この町、この国に注がれることをお祈りします。

最後に、申命記 10:14-16 をお読みしましょう。これは、イスラエルの民に対する勧めですが、私たちにもためになる言葉です。「10:14 見よ、天とその天の天も、地と地にあるすべてのものも、あなたの神、主のものである。10:15 主はあなたの先祖に心引かれて彼らを愛し、子孫で

あるあなたたちをすべての民の中から選んで、今日のようにしてくださった。 10:16 心の包皮を切り捨てよ。二度とかたくなになってはならない。」

VII. 祈り